No. 23

研究所だより

発　行
2009年９月１日
明治学院大学
社会学部付属研究所
〒108-8636
東京都港区白金台１－２－37
TEL (03)5421-5204〜5
所長　野　沢　慎　司

閉じたつながり／開かれたつながり

所長　野　沢　慎　司

人と人との「つながり」が今どうなっているのか、そしてそれはどうあるべきなのか――これは社会学や社会福祉学の主要な課題の一つであると同時に、私たちが生きていくうえで避けることのできない永遠の問いでもあります。人々のつながりは目に見えないものですが、それらをすべて「赤い糸」のように染色して遥か上空から俯瞰することができるならば、社会は複雑に編まれた巨大な編み物（つまりネットワーク）であることがわかるでしょう。私たちは、この巨大な編み物上の一点に位置して、様々な人とのつながりを維持し、使い、失い、新たに築きながら人生を送っているわけです。

ネットワーク論の研究では、「閉じたつながり」と「開かれたつながり」を区別しています。「閉じたつながり」とは、日々顔を合わせる家族や同僚など仲間うち集団内の人間関係です。互いに連携が取れ、自分にとって所属感や連帯感をもたらす小集団が重要であることは誰もが感じていることでしょう。職場や地域の組織がうまく機能するには内輪のチームワークが必要です。しかしこうした集団は、強い絆で結ばれるほど、対外的に分厚い壁を築き、閉鎖的集団となりやすいものです。そこでは、現状の問題を打破する革新的な考えが採用されることは少なく、既存のルールや規範による拘束が支配的になる傾向があります。

一方、仲間内の境界を越えて、自分になじみのない世界（業界・地域・関心事・趣味など）へと橋渡ししてくれる友人・知人との関係が「開かれたつながり」です。めったに会わない「弱い」関係の相手と話しているうちに目から鱗が落ちて内輪の「常識」の呪縛が解けたり、さらには新規プロジェクトの企画が持ち上がったりすることがあります。開いたつながりにも独自の強みがあるのです。組織にとっても、個人にとっても、閉じたつながりと開かれたつながりをいかにうまく組み合わせられるかが重要であると考えられるようになってきました。私たちは、置かれている状況に合わせて、つねに両者の最適な組み合わせを再検討する必要がありそうです。

当研究所の相談・研究部門が展開している地域における子育て支援事業および調査・研究部門が準備中の特別推進プロジェクトのいずれにおいても、「つながり」がキーワードになっています。どのようなつながりをどのようなかたちで築く必要があるのかを考え、社会に対して知識や支援を提供していきたいと思います。

地域内のつながり形成の場となった「市民講座」
（2009 年７月開催）

研究所各部門から

調査・研究部門

新しい調査・研究部門がスタートした。四月より、新任の石原先生、半澤先生が所員として、そして石井さんが研究調査員として参加してくださるようになった。昨年度まで研究調査員として勤めてくださった中西さんも、新しい立場で調査・研究部門の活動に参加してくださっている。

今年度の調査・研究部門の主な活動は、来年度より開始される特別推進プロジェクトの計画・準備である。「社会学科、社会福祉学科という学科の境界を越えて、共同参画できる研究プロジェクトができないか」「Do for others という大学の理念を基底にした活動ができないか」という、これまで研究所と社会学科を引っ張ってくださり前年度退職された三名の先生方の熱い期待に応えることが、スタート当初の我々に課された宿題であった。

四月より、ほぼ毎週月曜日に一時間半のミーティングを開催し、特別推進プロジェクトの計画・準備を重ねてきた。とにかく集まる。経験や専門といった各種「境界線」の存在に気づくことはあっても、それらを越境することを厭わず議論する。そういうスタンスでミーティングを積み重ねてきた。次第にプロジェクトの輪郭は明瞭となり、目指す方向性が共有されるようになった。五月の教授会にて企画内容の中間報告を行い、月曜日のミーティングへの参加を募った。呼びかけに応じて参集してくださった研究所スタッフ以外の参加者との議論を積み重ね、六月、「現代日本の地域社会における〈つながり〉の位相――新しい協働システムの構築にむけて――」という研究タイトルを創出するに至った。

人と人とのつながり。人と機関とのつながり。機関と機関のつながり。その諸相を明らかにし、世代を超えて社会を支えるつながりの様相を思考すること。戦後から現在に至るまで巨万の人口を引き付け続けている都心地域、都心から溢れた人口の受け皿となって発展してきた郊外地域、そして人口を輩出し続けたがために、人口が減少し存続すら危ぶまれる過疎地域。これら現代日本の典型地域を調査対象地として〈つながり〉の位相を明らかにし、それぞれの地域社会にふさわしい「協働システム」のありかたを、住民の皆さんとともに考える。これが、現在計画・準備されている特別推進プロジェクトの骨子である。特別推進プロジェクトの今後の展開に、期待していただきたい。

（調査・研究部門主任　浅川　達人）

相談・研究部門

本年度に予定されている幾つかの特徴的な取り組みを紹介したい。

二〇〇七年度から継続して取り組んでいるものに本学近隣に居住する子育て中のお母さん方を支援するプログラムがある。その成果であろうか、徐々に隣接区の子育て支援関係者のネットワーク会議で活動紹介の依頼を受けたり、子育て当事者対象の講座で当事者によるボランタリーな活動に関する講義の依頼を受けたりする機会が増えてきている。

三年度目に入る港区立子ども家庭支援センターとの協働事業であるが、「港区地域こぞって子育て懇談会」を一月に共催する計画である。昨年度は、子育てグループのネットワークを立ちあげた懇談会プロジェクトメンバーが企画立案においても主体的に参加いただけた。また、広範な領域からの参加者も得られ、これまでにない盛会となった。年度末には『報告書』も取りまとめ、関係者に配布することができた。本年度も、すでに懇談会の企画会議の開催に向け活動が始まっている。

四年度目に入る「子育て相互支援活動のための活動スキルアップ講座」も企画の準備を始めている。これまでは、既存の子育てグループとの出会いを求め、グループ間のネットワーク構築の支援に努めてきたが、今後は、これから子育て支援活動に関わりたいと願う人との接点を求め、活動の中核を担う人材を育てる取り組みを模索する予定である。

本年度も開催する当該部門の伝統行事となっている「社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会」は、総合テーマを「ソーシャルワーク実践を支えるスーパービジョン」とし、ソーシャルワーカーによる「相互学習」「相互批判」の場として専門職としての「育ち」を後押しできるような基調講演と分科会を計画している。

当該部門は、地域にアウトリーチする方法を模索しながら、新しい「貢献」の方法について「子育て支援」をテーマに検討してきた。浮遊するような人々の暮らしが、重苦しい社会問題の一つとして顕在化している。他部門とジョイントしながら、次の段階の「貢献」の方法についても検討を始める時期にあると感じている。

（相談・研究部門主任　北川　清一）

学内学会部門

学内学会はいま発展しつつあります。二〇〇八年十一月に行なわれた研究発表会では、例年の二倍の十四件の発表があり、発表時間を五分短縮し、二会場での実施となりました。発表者は、学部学生、大学院生、卒業生と幅広く、発表内容も多岐にわたり、充実した発表会になりました。発表者だけでなく、聴衆としての参加者が増えたことも大変嬉しいことでした。

今年度の学生部会委員は全部で三十四名となっています。特に一年生が十五名も委員となってくれたことは画期的なことです。また五月十六日（土）に、社会学部ゼミ対抗スポーツ大会を開催しましたが、参加者は、競技参加者二七八名、スタッフ三十一名、教員七名、計三一六名と史上最高の規模となりました。スタッフは学内学会オリジナルのTシャツを作り、大会の雰囲気を盛り上げました。今年の研究発表会は十一月十四日（土）に予定されています。昨年以上の発表者があると良いと願っています。特に卒業生部会からの発表が増えることを期待しています。

さて、六月二〇日に学内学会総会が開催されました。そこで次のような意見が出されました。

(1) 活動体制ついて、特に卒業生部会の強化を検討してはどうか。

(2) 卒業部会に若い層を取り込むための方策を考えることが必要ではないか。

(3) そのため、教員に働きかけて、卒業後五年、一〇年程度のゼミ生を学内学会の活動に結びつける働きかけを学内学会として行なってはどうか。

(4) 退職した先生及び卒業生から選ばれる「名誉会員」制度の制定を検討してはどうか。

(5) 名誉会員が積極的に学内学会に参加していただけるような方策を考えることが必要ではないか。

以上の諸点は、今後の学内学会運営委員会で検討をして行きたいと思います。

最後に事務局の場所の移転についてです。現在、事務局は社会学部付属研究所の事務室の中にありましたが、同じ研究所内の一室をいただけることになりました。玄関から見て事務室の反対側にある部屋です。より快適で機能的な事務局を作りたいと思っています。

（学内学会部門主任　河合　克義）

新任あいさつ

始めまして。四月より研究所の研究調査員となりました石井大一朗です。三月に、六年間かかった博士論文をなんとか書き終えました。研究所の今年度は、来年度から始まる特進プロジェクトの準備の年です。これまで私は「大都市郊外におけるコミュニティの再編を、ニーズを持つ当事者のつながり」に着目して研究してまいりました。特進プロジェクト開始を期に、気持ちを新たにして取り組んでいきたいと思います。研究所が今までに増して活発な場となるよう頑張ります。（石井　大一朗）

二〇〇九年四月に社会学部の専任教員に就任しました。同時に調査・研究部門の所員を拝命しました。

わたしはずっと国立大学育ちで、前任校も国立でしたから、明学以外の私立大学のことは実はよくわかっていないのですが、それでも私立の文系学部に付属研究所が存在するということには、驚きました。付属研究所の歴史も紆余曲折はあったとは聞きますが、それでもその存在自体が、明学社会学部の奥行きの表れでもあるのでしょう。

まだ着任から日が浅く、研究所のこともわからないことだらけで、しかもチームプレーは苦手ときていますので、みなさまにはとにかくご迷惑をかけるばかりだと思いますが、どうかよろしくお願いいたします。（石原　俊）

今年度、久しぶりに所員に復帰となりました。主に相談部の活動と、今年度の研究所年報の編集にかかわっています。これからの研究所のあり方も含めて、所長、主任や他の所員の皆さんとともに考え、実践していきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。（茨木　尚子）

学内学会会計係に着任いたしました。学科や学年の違いを越えて、また在校生と卒業生という垣根を越えて交流できる場が充実してきたことをうれしく思います。大学の授業や研究、プログラムを洗練させるのは、ここに集う人々の知的関心です。研究所や学内学会が人々の関心を刺激する場であるよう、またここでの研究やプログラムの成果を社会に還元できるよう、今ある課題に対し積極的に取り組みたいと考えております。（坂口　緑）

本年度より明治学院に着任すると共に所員になりました。これまでは、地域研究を重視する部門などに在籍していながら、地域問題を直接的な研究対象にはしてきませんでした。

来年度から研究所が中心になって進める特別推進研究は、地域が抱える課題に取り組んでいく予定です。これまで正面から扱ってこなかった研究対象に向き合う、良い機会だと思っています。（半澤　誠司）

市民講座報告

二〇〇八年度も市民講座として、「港区地域こぞって子育て懇談会」（以下、懇談会）を港区立子ども家庭支援センターと共催し、みなと子育てネットＷａ・Ｗａ・Ｗａ（子育てグループのネットワーク）メンバーと企画しました。また当所が募った学生ボランティア（第四期めいがくキッズ＆ママ・パパ応援隊）たちも参画しました。企画過程では、昨年度の懇談会で提案した「子育てにやさしい街への三つの提案」の実現について協議しました。「子育てにやさしい街への三つの提案」には、子連れにやさしい店や皆が集えるオープンスペースがほしい～が含まれていました。でも今一度、求めるものは何だったろう？　と協議を重ね、店やオープンスペースという「場」がほしいのは、地域の中で顔見知りをふやしたい・子どもたちを地域のいろいろな人の中で育てたいから、子育て家庭以外の人たちにも地域の「つながり」はとっても必要では？そんなことが重ねたディスカッションからはっきりしました。そこで二〇〇八年度懇談会は、「つながりの輪をひろげたいなぁ」として、次なる提案を示しました。当日は区内の子育て支援関係機関十三名にコメントをもらった上で参加者間のラウンドミーティングを行いました。二〇〇九年度に入り七月十七日に子育て支援関係機関や子育て支援活動者間のネットワーク拡大も意図して、市民講座「地域と家族の『子育て力』どうはぐくむ？　どうささえる？」を開催しました（講師：本学杉山佳子教授）。二〇〇九年度も引き続き、「港区地域こぞって子育て懇談会」を二〇一〇年一月二十三日（土）港区立男女平等参画センターにて開催予定です。

（相談・研究部門副手　平野幸子）

第23回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会

「ソーシャルワーク実践を支えるスーパービジョン」

日　時：2009年10月24日（土）10：00～17：00
① 基　調　講　演　10：00～11：45
② ワークショップ　13：00～17：00
会場：明治学院大学白金キャンパス

基調講演：「ソーシャルワーク実践を支えるスーパービジョン」
講師　堀越　由紀子（田園調布学園大学教授）

ワークショップ：

A：新人ソーシャルワーカーにとってスーパービジョンとは？
講師　平野　幸子（本学社会学部付属研究所ソーシャルワーカー）
コーディネーター　根本久仁子（聖隷クリストファー大学准教授）

B：中堅ソーシャルワーカーのスーパービジョンシステム ── ソーシャルワーク発展への貢献 ──
講師　堀越　由紀子（田園調布学園大学教授）
コーディネーター　大瀧　敦子（本学教授）

C：ソーシャルワーク実習生へのスーパービジョン
講師　池田　雅子（北星学園大学教授）
コーディネーター　北川　清一（本学教授）

連　絡　先
明治学院大学社会学部付属研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
Eメール　issw@soc.meijigakuin.ac.jp
TEL 03-5421-5204・5205　FAX 03-5421-5205

二〇〇九年度 社会学部付属研究所 プロジェクトの紹介

★一般プロジェクト

☆e-democracy のための基礎的研究　（代表 宮田加久子）

☆デンマークにおけるアソシエーショナリズムの展開と実際 ── 誰が「弱者」を支援するのか　（代表 坂口　緑）

☆「人的資本」概念の再検討　教育経済学とマルクス経済学の文脈における（代表 稲葉振一郎）

☆エスノメソドロジー研究を社会学史のなかで振り返る　（代表 西阪　仰）

☆生活保護担当職員の実践力を高める研修プログラムおよび研修体系の構築について　（代表 新保　美香）

☆明治・大正期におけるキリスト教主義養老院の実態　（代表 岡本多喜子）

☆La Citta del Sorriso の実態調査と日本での展開可能性　（代表 村上　雅昭）

☆更生保護の援助枠組みについての研究 ── 援助の固有性の検討　（代表 久保　美紀）

☆沖縄を中心とする労働力移動 ── 海外移民と国際出稼ぎの研究　（代表 水谷　史男）

☆児童養護施設における家族支援に関する研究 ── ソーシャルワーク支援の標準化とＩＴ活用の可能性について　（代表 北川　清一）

☆ステップファミリーへのサポート研究 ── オンライン・オフラインの支援活動の評価　（代表 茨木　尚子）

二〇〇九年度社会学部付属研究所スタッフの紹介

所長	野沢　慎司
調査・研究部門主任	浅川　達人
相談・研究部門主任	北川　清一
学内学会部門主任	河合　克義
所員	石原　俊
〃	茨木　尚子
〃	大瀧　敦子
〃	岡本多喜子
〃	坂口　緑
〃	半澤　誠司
〃	松島　浄
研究調査員（調査・研究部門）	石井大一朗
ソーシャルワーカー（相談・研究部門）	濱田智恵美
副手	平野　幸子
教学補佐	平野　美佳
事務担当	渡部　裕子
学内学会部門事務担当	佐々木敬子